



東京2020オリンピック
ビーチバレーボール日本代表
いしじまゆうすけ
石島雄介さん
深谷魂を胸に
世界の大舞台に挑む!

「深谷は、自分がバレーボールを真剣にやるきっかけになった場所であり、インドアの試合で最後のプレーをした場所なので、すごく縁を感じます。今でも、深谷高校で学んだ3年間で自分の競技人生の中で土台となっていて、深谷の地に来ると深谷魂が出てきますね。」と深谷とのつながりを語るのは、深谷高校バレーボール部出身で東京2020オリンピック（以下、東京五輪）にビーチバレーボール日本代表として出場する石島雄介さんです。今回、母校である深谷高校にオリンピック出場の報告で立ち寄った際にお話を伺うことができました。

男子バレーボール界史上初となるインドア（北京五輪バレーボ



▲深谷グリーンパーク・パティオのビーチバレーコートで母校 深谷高校の後輩を指導する石島選手(写真右端)

ール日本代表)とビーチ(東京五輪ビーチバレーボール日本代表)両方でのオリンピック出場となった石島選手。ビーチバレーボールの見どころを伺うと、「対戦ペアの特性に応じて、さまざまな駆け引きが求められる種目なので試合ごとに戦い方が違い、見れば見るほど面白くなる場所ですね。」と注目ポイントを教えてくださいました。

自身2度目、13年ぶりの出場となるオリンピックへの意気込みについて、高校時代の恩師の言葉『練習は厳しく、試合は楽しく』の教えを胸に自身と向き合い、試合で発揮できるように準備していきたいと熱く語る石島選手。恩師の教えと深谷魂を胸に世界の大舞台に挑みます。

L・フォルテ

男女共同参画情報コーナー

ともに認め合い 支え合う 元気と笑顔で参画するまち ぶかや
男女共同参画推進センターの愛称です。このコーナーでは、男女共同参画に関する情報を皆さんに紹介します。

個人権政策課 ☎ 574 - 6643

女性活躍の先駆者 尾高ゆう(深谷出身)

近代日本経済の父、渋沢栄一翁を主人公とした話題の大河ドラマ『青天を衝け』。その第18話で糸繰りする少女のシーンにお気づきになったかたもいるのではないのでしょうか。あの少女こそが、女性活躍の先駆者、『尾高ゆう』です。

ゆうは、明治3年富岡製糸場の初代工場長となった父・尾高惇忠の意を受け、工女の募集難に直面していた富岡製糸場を救うため、最初の伝習工女として操業に携わります。当時まだ14歳であったゆうの決断と行動は、近隣の女性にも影響を与え、無事に製糸場の操業開始を迎えることができました。

工場では、日曜日は休日、夜に仕事することは禁止、休みには演芸や祭りを楽しむなど、労働条件も配慮され、現代と比べて女性の地位が低く扱われていた明治初期としては、惇忠とゆうの取り組みは非常に先進的なものでした。

深谷に生まれ、女性活躍の先駆者として活躍したゆうの生き方を、現代に生きる私たちが知ることで、普段行っている男女共同参画の取り組みについて、改めて見詰め直してみませんか。



▲尾高ゆうの写真。現在の深谷市下手計に生まれたゆうは、富岡製糸場の第一号伝習工女として活躍しました。

ぶっかちゃんの日常から
深谷が見えてくる

ぶっか 散歩

③ 渋沢栄一翁の銅像を巡る③

今日は、旧渋沢邸「中の家」にある渋沢栄一翁の銅像を見に来たよお〜♪
立派な門を通過して敷地内に入ってみると、すぐ左手に侍姿の栄一翁の銅像があったよお。生地に建つ「主屋」を望むように立っているんだね〜。もっと近くで見てみよう〜と。



◀この銅像は、若き日の栄一翁をモデルにしているから、市内のほかの栄一翁の銅像とは違って、着物にちよんまげ姿なんだねえ〜。とってもレアだし、綺麗な姿だねえ〜。

ぶっかちゃんのつぶやき

夏のぶかやさいフェアを開催しているよお！深谷の野菜を知って、味わって、買って、楽しんでねえ♪ Y(o0ω0o)Y



▲ここが、「中の家」の正門だよお。門の前には明治の文豪 幸田露伴先生の書いた石碑が設置されているんだよお〜。

心の広場

幡羅小学校3年(現4年)
浅見 侑芽さん



たすけたいな

わたしがすんでいるこのせかいには、色々な人がいます。その中でも何かが不自由だったり困ったりしている人がいます。その人たちをどうたすけるか自分で考えてみました。

前にこんなテレビをみたことがあります。耳が聞こえない女の子がいる、耳がきこえないお母さんの話です。そのお母さんは女の子にがんばって手話を教えていました。その、女の子はバレエを習っていたのでおどろきました。音が聞こえないのにバレエをおどっていたからです。その女の子は耳にきかいたいものをつけていました。先生が手を使ったりして音楽のタイミングなどを教えていました。ほかの友だちはふつうにレッスンしていました。耳が聞こえないって大変だなと思いました。お母さんは手話を教えて、先生は手を使って教えて、友だちはふつうにしていました。もしわたしが耳が聞こえなかったらみんな

にどうしてほしいかなと考えてみました。わたしだったらみんなとおなじようにしてほしい、だけど困っている時はたすけてほしい、そんなふうに思いました。お母さんや先生は困っていることをたすけて、友だちはふつうにしていました。何かをしてあげることだけじゃなくて、ふつうにほかの人と同じようにすることも、たすけることかなと思いました。そうだ、不自由な人でもふつうにくらせる世かにならばいいんだ。大人にならないとたすけられないと思っていたけど、そんなことはないんだと思いました。

では、わたしにながができるでしょうか。前、お母さんに白いつえを持っているひとは目が不自由な人であること、点字ブロックは、目の不自由な人が、自分で安全にふつうに歩けるようにくふうされているものだと知りました。それを知っているだけでも、わたしにはできることがあります。白いつえを持っている人を見かけたら、道を空けたり、困ってそうだったらたすけることができます。

たすけたいな、という気持ちはあったけどまだ自分にはできないと思っていました。けれども、その人の気持ちを考えるだけでも、できることっていっぱいあるんだなと思ってきました。これからだれかの気持ちを考えることをつけていきたいです。せかいみんながしあわせになるといいと思います。